

WCRP

World Conference of Religions for Peace Japan

8
2022
August
No. 514



ウクライナ人家族の滞在する家



ワークショップに参加した子どもたちとダンシング（マリアポリ・フィオーレにて）

こころの扉—「他者の尊重を願って」 竹村牧男	2
ウクライナ難民支援ボランティア ポーランドへ派遣	3~4
人身取引防止タスクフォース 現地学習会を開催	5
女性部会「いのちに関する学習会」を開催	6
「平和と和解のためのファシリテーター養成セミナー」	
2022年度第2回フォローアップセミナー開催	7
第4回 平和研究所研究会 松井ケティ所員	7
新役員紹介	8
今月のWCRP新熟語、WCRPの活動	8



「他者の尊重を願って」

ウクライナでは、ロシアの武力による一部領土の制圧・占領等、悲惨な戦争がもう数か月も続いている。地球上では他にも、あからさまな民衆の人権の抑圧、民主主義の否定が、複数の地域で起こっている。このことを想うと、地球社会の行く末に悲愴な思いを抱かずにはいられない。力の支配でなく法の支配を、武力闘争でなく平和の安定を、国際社会においてどのように実現していけばよいのであろうか。その際、宗教者には何が出来るので

WCRP 日本委員会 会長
理事 研究所 所長
平和 研究 所 教授
東洋 大学 名 譽 教 授

竹村牧男



あろうか。

宗教者は、さまざまな具体的な行動を分に応じて実践していくとともに、誰もががうなずける宗教的人間観・世界観を語っていくことも大切な役割であろうと思われる。その際、日本の悲惨な戦争が終焉を迎えた直後に、『霊性的日本の建設』を説いた、鈴木大拙の言葉は、参考になるかと思う。

大拙は、「個己の自主性を樹立し、人格的価値の他に換

うべきもののないということを十分に認識し、自ら尊ぶはまた大いに他を尊ぶ所以であることを覚悟しなければならぬ」と説き、さらに「個個円成こごえんじょうの故に事事無礙じじむわいである。事事無礙の故に個個円成である。これ（華嚴的世観）が実に法界の様相である。東洋的思想、東洋的感覚、東洋的生活の基底に流れている根本原理である。……霊性的日本は、この如くにして建設せられる。これが自分の確信である」という。そして、次のように諭すのである。

「自らの価値を尊重するが故に他の（価値）をもまた尊重するということは、自と他とがいずれもより大なるものの中に生きていくとの自覚から出るのである。自と他とはそれより大なるものの中に同等の地位を占めて対立しているのである。より大なるものに包まれているということは、自をそれで否定することである。換言すると、自の否定によりて自はそのより大なるものに生きる。そして兼ねてそこにおいて、他と対して立つのである。自に他を見、他に自を見るとき、両者の間に起きる関係が個個の人格の尊重である」

十全な民主主義と平和の実現のためには、「自と他とがいずれもより大なるものの中に生きていくとの自覚」を取り戻すことが肝要であろう。宗教者は、このことを語り広めていくべきではなからうか。少なくとも、宗教教団が無辜の民を殺戮する戦争を支持・加担すべきでは絶対にならないであろう。

ウクライナ難民支援ボランティア

(山越教雄・WCRP日本委員会事務次長) ポーランドへ派遣

WCRP日本委員会は、ウクライナ難民支援ボランティアの第1次隊を7月15日から31日まで派遣した。これは、ロシアのウクライナ軍事侵攻によって、国外に避難したウクライナの人々に対する人道支援活動の一つとして行うものである。

この第1次隊は、5月上旬にモルドバ、ポーランド、スロバキア、ルーマニア、ハンガリーの5カ国で行った事前調査を踏まえ、実現性・安全性などを考慮しボランティアへ派遣され、これから順次派遣されるボランティア隊の具体的な活動内容の調整・視察を重ねた。メンバーは山越を隊長に、橋本高志(同平和推進副部長)、廣田恭子(立正佼成会職員)の3人。

○フォコラーレ運動

視察の初めに、事前調査でも訪ねた、ポーランドの首都ワルシャワ郊外にあるフォコラーレ運動(カトリック在家運動体、本部：ローマ)で難民受け入れを行っている施設「マリアポリ・フィオーレ」を訪問した。この施設では、数家族19人が2階の戸建て2棟に分れて暮らしている。

まず、責任者のイリーナさんをはじめ受

け入れを担当する方から、ウクライナの人々を受け入れる上で必要な要望を聞いた。「生活する上で欠かせないポーランド語を学ぶための建物にトイレを設置したい」

「お弁当などを作り販売することによって少しづつ収入を得られるようになった。キッチン冷蔵庫などが家庭用で不便が多く設備を整えたい」

「住居の庭に家庭菜園を作りたい」「伸び放題の植樹を剪定したい」

「冬に備え、薪置き小屋を整備したい」など、さまざまな要望が出され、ボランティアでかなうものは今後実施する予定である。

4日ほど滞在した中で、具体的なボランティア活動として、子どもたちを対象としたワークショップと夕食交流会を行った。

ワークショップでは、マリアポリ・フィオーレで暮らしている10人の子どもに加え、徒歩圏内にある別の施設で暮らす子どもたちも参加し、約30人ほどが集まった。メンバーが自己紹介したあと、オカリナ演奏とバルーンアートを行った。最後にみんなでダンスを踊って大いに盛り上がった。

夕食交流会では、それぞれがウクライナ、イタリア、日本料理を持ち寄り交流した。日本料理は現地材料を調達し、てんぷら、冷製うどん、お好み焼きを用意した。食事中は、ウクライナ語、イタリア語、日本語で「全部おいしいです」の言葉と笑顔が飛



夕食交流会

び交って
いた。
滞在中
何度かウ
クライナ
料理をい
ただき、
生活支援
になれば
と調理代
金をお支
払いました。

○クラクフ(中世の首都)

ワルシャワから南に約300キロ、11世紀から約550年間首都であった古都。この町に、SalamLab(平和ラボ)を訪ねた。この団体は本来、諸宗教の枠組みによる平和構築や紛争和解の取り組みを行う非営利組織で、イスラームフォビア(イスラム恐怖症や嫌悪)に関する教育を行うなど、宗教と人々をつなぐ役割を担っている。クラクフにも多くの難民が訪れるようになり、大きな劇場を借り受け難民センターを開設したとのこと。一時期は毎日100人ほどの難民が訪れ、氏名登録のあと、滞在受け入れのホストファミリーや受け入れの無料ホテルが見つかるまでの一時避難所の機能を果たしていた。現在でも、この

センターを通過した約5万人のデーターを管理し、支援を続けている。

また、クラクフから西に55キロに位置するアウシュヴィッツ博物館を見学した。

○ワルシャワ市内

ウクライナ国内で全面的に戦闘が行われていた時期には、多くの難民が列をなし、あふれ返っていたというワルシャワ中央駅。今は駅構内に開設された難民センターを訪れる人は以前ほどではない。しかし、駅舎を一步出た敷地に設置された大きなテントの入り口で受付の軍関係者に、手首に巻いた証明書を提示し入っていく人々があった。無料食堂である。ここの運営を行うのは「ワールド セントラル キッチン」というNGO団体。平日の午後2時を回った時間帯だというのに、常時100人を超える人々が食事をとっていた。

われわれ3人は、この食堂でボランティアを申し出た。駅構内に戻り、ボランティア受付で手続きを行う。パスポートを提示し、スマホからGoogleフォームで個人情報を入力するだけである。登録が完了すると、名札とビブスを渡され食堂内へ。我々の仕事は、食事の済んだテーブルを整えることである。2人がテーブル上に残された食器を片付け、アルコール消毒液でふき取る。もう一人はテーブルからこぼれた



ボランティア姿の3人

かった、「ありがとう」と。そのテントの一角に設けられたスペースで無邪気に遊ぶ子どもらの大きな声がしていた。

さらに、中心部からトラムとバスを乗り継いで90分ほどのところにあるEXPO会場を活用した、政府が管轄するワルシャワ難民センターを訪ねた。多くの洗濯物が干されており、相当数の人が滞在しているようであるが、事前連絡なしでの訪問では、ボランティアの申し入れは受け入れられなかった。

最後にカトリック東京大司教区の菊地功大司教より情報提供いただき、カリタスポーランドを訪問、広報担当者より説明を受けた。カリタスポーランドは多い時には国内で44カ所のキャンプを運営し、食料や衣類の配付、次の目的地までのサポートなどを行っていた。現在は減少傾向にあると

食器やごみを掃き集める。約2時間のボランティアであったが、多くの人から声をかけられた。言葉は通じぬとも意味はわか

のことだが、国境近くの町のキャンプを紹介してもらった。またカリタスが運営する市内の施設を紹介いただき訪問、即興にてオカリナ演奏とバルーンアートのワークショップを行った。

○ウクライナ国境の町プシエミシル

カリタスポーランドで得た情報をもとに、ワルシャワから南南東に約300キロの町プシエミシル、さらにウクライナ方面に10キロ走った国境の村メデイカを訪ねた。村に設置された出入国管理センターから100メートルほど離れたところにUNICEFやUNHCR、その他いくつかの民間NGOのテントが見受けられたが目的のカリタスのキャンプはなく、時々徒歩でウクライナに向かう人、ポーランドに来る人々の往来が見られた。

カリタスポシエミシルの責任者を訪ね状況を聞いた。「今は、多くの難民は仕事のないプシエミシルを離れクラクフなど内陸の都市へ移動している。従って今はキャンプを閉じているが、厳しい冬には再度国境を越えて難民が増える」と話していた。

第2次隊は、これらの情報と成果を踏まえマリアポリ・フィオーレを拠点にカリタスポーランドとも連携して8月1日から活動を開始している。

人身取引防止タスクフォース

現地学習会を開催

人身取引防止タスクフォースは7月14日、香川県内でインドネシアからの実習生を受け入れている安岐水産を訪問し、現地学習会を開催した。

今回は、インドネシア技能実習生を受け入れている企業を実際に訪問して外国人技能実習制度について学び、宗教者のできる具体的な取り組みについて模索することを目的に開催された。

タスクフォース責任者の宍野史生師（扶桑教管長）が開会あいさつを述べたのち、実習生が働く工場を見学した。主にアオリイカやタコの水産加工を行い、刺身や総菜として販売している。経験を積んだ実習生には、各部署の責任者を任せるなど人材育成も行っている。



工場見学

次に、安岐麗子社長が「技能実習生受け入れの経緯」について講演を行った。監理団体の設立に加わったきっかけは、現地の人材派遣機関が作成した書類に不備があり、実習生の来日取り消しとい



懇談の様子

う不当な扱いを受けたことに胸を痛めたからだという。その後、2015年に「ヒューマンリング協同組合」を設立。これまで20人ほどの実習生を受け入れてきた実績があり、現在は特定技能実習生3人、特定活動実習生1人、来日したばかりの実習生4人、計8人が就労している。「日本で過ごした経験が、その後の人生を変えるきっかけになってもらいたい」という信念のもと、実習生と家族同様の関係を築いている。また、日本語習得も兼ねて小学校で絵本の読み聞かせをしたり、香川県内の企業PRコンテンツに実習生が参加するなど、会社の枠を超えた地域との交流も行っている。こうした事業や交流によって、ほとんどの実習生が3年で日本語検定2級を取得し、帰国するという。

安岐社長は、今後の事業として、「実習生が帰国した後の仕事を作っていく。技術を習得した実習生と共に現地で事業を行



実習生とともに

いたい」という思いを語った。すでにこの構想は、国際協力機構（JICA）における事業として採択されている。

学習会ではその後、20〜30代の実習生3人との懇談会を行った。ティシャさんは、同社で3年間の実習を終え、帰国したが、「もう一度安岐水産で働きたい」と数年ぶりに来日し今春から就労している。

また、宮内和彦氏（ヒューマンリング協同組合代表）が講演を行った。同組合はこれまで、278人の受け入れ実績があるとし、組合の役目として、日本とインドネシアの架け橋となり、互いに理解を深め合ってもらうことが大切と述べた。

最後に、同タスクフォースの小宮山延子師（カトリック）があいさつを述べ閉会した。

同タスクフォースでは、多くの課題がある技能実習制度を検証し、より人権が守られる制度の確立のため政府や関係機関に提言を行っていく。

人身取引世界反対デーにむけて

7月30日の人身取引反対デーによせて、昨年の内容を踏襲した声明文をHPに掲載し、改めて人身取引の根絶を求める意を発表した。さらに今年度は、広く日本社会に向けた啓発活動として動画を作成した。



女性部会「いのちに関する学習会」を開催

女性部会は、7月2日、オンラインで「いのちに関する学習会『ジェンダー問題を知りたい!』」を開催、約50人が参加した。

女性部会では、宗教を持つ諸宗教の女性の立場から、いのちの問題を考えるために、毎年「いのちに関する学習会」を開催し、教育・貧困・医療等さまざまな視点から学びを深めている。

学習会では、女性部会の森脇友紀子部長（カトリック東京大司教区アレルヤ会会長）の開会あいさつに続き、同志社大学グローバル・スタディーズ研究科教授の秋林こずえ教授が、『ジェンダーと平和』をテーマに講演した。



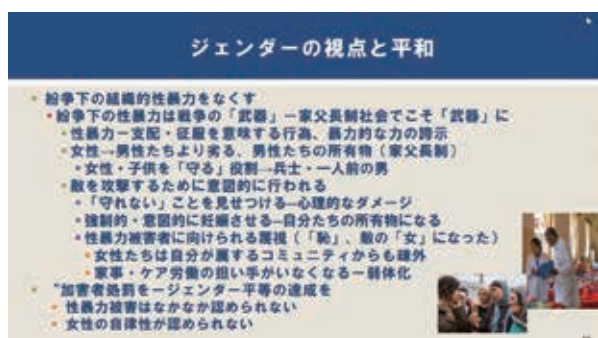
講師の秋林こずえ教授

まず、秋林教授は、「ジェンダー」という言葉について説明。一つ目が言語学的使用語、二つ目が女性らしさ、男らしさ、社会的・文化的に構築され

た知、三つ目が性と生殖に社会がつける意味があるとした。

また、「女らしさ」や「男らしさ」というものは、行動様式・役割・身体的特徴が複雑に絡みあって出てくるものであり、それらは社会の価値観や習慣などを身につけていく過程の中で社会化していったと述べた。そして、こういった「ジェンダー」から見えてくる社会の構造と問題に触れた。

例えば、生まれたときの身体的特徴をもとに性分化することや、集団としての男性の方が、集団としての女性より身長は高いものであるというように社会が二分法を規定しているなど、二つに分けることで問題が生じると指摘



さらに、規範（ノーマル）とよばれるものが、「そうあるべき」「それが普通である」といった逸脱は許されなような価値観の強制も問題であり、優劣や格差などの権力構

造を生み出すとした。

また、性暴力は支配や征服を意味する行為であり、暴力的な力の誇示であり、紛争下では戦争の武器となることが明らかになってきたと報告。敵を攻撃するために、女性や子どもなど、守るべき者を守れないことを見せつけて、精神的なダメージを与えるためや、恐怖を抱かせるために意図して行われることもあると説明した。

そして、フェミニニストという視点を持ち、男性も巻き込んだジェンダー平等、対等に生きられる社会を目指した取り組みが大切であると訴えた。



いのちに関する学習会の参加者

講演後、参加者からの質問やコメントなどに応答し、さらに学びを深めた。その後、グループに分かれて講演を通じた学びや感想を共有し、全体でも発表。最後に、女性部会の田中佑佳子事務局長（立正佼成会）が閉会あいさつを述べて終了した。

「平和と和解のためのファシリテーター養成セミナー」2022年度第2回 フォローアップセミナー開催

和解の教育タスクフォースは、「平和と和解のためのファシリテーター養成セミナー」の2022年度第2回フォローアップセミナーを7月30日、佼成図書館視聴覚ホール（東京・杉並区）にて開催し、スタッフを含め21人が参加した。『いのちが大切にされる社会を目指す』をテーマに、本セミナーは第1期、第2期セミナー参加者のフォローアップ研修及び交流の場となった。とくに修了生が現場での実践に向けて、ワークショップを企画・実施することでスキルアップを図るとともに、体験・コメントし合うことによる磨き合いが行われた。

セッションでは、伊藤高章講師（上智大学グリーンケア研究所客員所員・佼成病院チャプレン）より『いのちが大切にされる社会を目指す』をテーマに講演。いのちへの道のりとしての「生命誌的」視点と、今は政治が命をめぐる議論の舞台であると



ワークの様子

しての「生政治的」視点について学び、いのちが大切にされる社会を目指すうえで、「生政治的」視点は重要であると指摘した。その後、修了生が企画したワークショップが行われ

た。セッション2では、青木佑太氏と小川裕久氏（第2期生）のファシリテーションで『いのちの大切さを学ぶ』をテーマに「命」の意味や「いのち」をイメージすること、「死」の疑似体験を通して、いのちの大切さや、自分が何を大切にしているかに気づき、今後自分のいのちをどう使うかの「使命」について考えた。また、セッション3では、飯野真理子氏（第2期生）のファシリテーションで『幸せの木ワークショップ』をテーマに①幸せになってほしい人②その理由③幸せのための一歩（自分にできること）④それが最大限に実現したらどうなるかという問いに沿ってワークが行われ、自分や大切な人の幸せについて考えた。セミナー参加者からは、自分のいのちや周りの人々のいのち、いのちをどう使うか、また相手を幸せにすることが自分の幸せであり、周りのいのちの大切にする社会をよりよくし、互いのいのちを大切にする社会づくりに繋がるのだと学んだとの声が寄せられた。

第4回 平和研究所研究会

松井ケイ所員

平和研究所の第4回研究会が7月12日、専門メディアセンター（東京・杉並区／オンライン併用）で開かれた。松井ケイ所員（清泉女子大学教授）が「教育者としての宗教者の行動・東北アジアの平和をめざして―未来の地域社会の平和をめざして―非暴力による対立・分断をのりこえるための宗教者の行動」と題して発表した。



研究会の様子

松井所員はまず、国連教育科学文化機関（UNESCO）と連携した韓国のアジア太平洋地域国際理解教育センター（APCEIU）の呼びかけにより、東北アジアにおける平和教育のための共通カリキュラムを開発するプロジェクトを紹介。その目的は「平和教育者に平和教育の共通の目標、意味、内容、方法、学習成果を提供する」「東北アジアのニーズと文脈に適したUNESCOのビジョンに忠実である平和教育の成果を提供する」ことで、成果として「明確かつ柔軟なカリキュラムの手引きになる」ことが期待されていると述べた。

ビジョンとしては、まず「個人の平和実現」個人が内なる平和を達成し、安全で尊重され、意見を聞いてもらえると感じ、あらゆる暴力から解放された心の状態」を挙げ、次いで「社会、国家、世界の状態における平和をめざす」ことだと語った。

またこのプログラムは、「現在の東北アジア諸国の政府の活動が平和を維持する努力から離れ、ナショナリズムの強化と軍事力の強化に向かう傾向がある」ために必要だと強調した。

カリキュラムとして、「紛争と平和を理解する」「尊厳教育」など19項目を示した。

新役員紹介

新たに就任したWCRP日本委員会の役員を紹介する。

理事

大西英玄（北法相宗音羽山清水寺成就院住職）



大西理事

1978年、京都生まれ。関西大学社会学部卒業後、アメリカへ2年間留学。帰国し高野山準別格本山恵光院にて四度加行を

修め、清水寺僧職として勤める。2013年に山内塔頭成就院住職晋山。京都府柔道場連盟顧問、並びに社会福祉法人同和園評議員を経て副理事長に就任。WCRP日本委員会では、青年部会副幹事を務める。

竹村牧男（東洋大学名誉教授）

1948年、東京生まれ。東京大学文学部卒。文化庁宗務課専門職員、三重大学人文学部助教授、筑波大学教授（哲学・思想学系）等を経て、2002年に東洋大学文学部教授。09年9月から20年3月まで、東洋



竹村理事

大学学長。現在、WCRP日本委員会平和研究所所長。筑波大学名誉教授、東洋大学名誉教授。専門は仏教学、宗教哲学。唯識

思想研究で博士（文学）。

武藤謙一（日本聖公会首座主教）

1954年、山梨県清里生まれ。77年3月桜美林大学経済学部卒業。78年日本聖公会横浜教区聖職候補生認可。81年3月、聖公会神学院卒業。横浜教区千葉復活教会、市



武藤理事

川聖マリヤ教会勤務。83年6月執事接手。84年12月、司祭接手。以後、静岡県清水、千葉県銚子、神奈川県小田原、山梨県清里、

静岡県沼津の各教会牧師として勤務。2012年7月、九州教区主教に選出され同年12月主教接手。13年4月より九州教区主教就任。20年10月、日本聖公会首座主教就任。

今月のWCRP新熟語

WCRP事務局が日常の中で感じたことを漢字2文字で表し新しい熟語を作ります。

見近（みぢか）

ポーランドで多くのウクライナ人にお会いしました。朝5時くらいにスツケースを引く母子や100人超の人々が無料食堂に通う姿を見て、ウクライナを身近に感じました。

WCRPの活動

《8月》

- 7月31日 ウクライナ難民支援ボランティア第2次隊 *14日まで
- 3日 和解の教育タスクフォース第2回会合（オンライン開催）
- 4日 比叡山宗教サミット35周年
- 8日 第50回原爆殉難者慰霊祭（長崎）
- 14日 ウクライナ難民支援ボランティア第3次隊 *28日まで
- 29日 女性部会第3回委員会
- 30日 災害対応タスクフォース第2回会合

掲載内容の無断転載を禁ず。